



年次晩餐会で挨拶する宮下秀樹会長

平成19年度年次晩餐会

東京に戻って変わりなく開催

■ 460人が出席

平成19年度の年次晩餐会は12月1日、東京・品川のグランドプリンスホテル新高輪の国際館パミール3階「北辰」で開かれた。昨年は名古屋だった。2年ぶりに東京に戻って、いつもと同じように460人の会員が出席した。

■ 会長挨拶

宮下秀樹会長の挨拶が始まった。宮下会長にとっては、今年5月に

会長となって初めての晩餐会だ。

皇太子殿下は残念ながら出席されなかった。宮下会長は、皇太子殿下から「日本山岳会の年次晩餐会に出席できず大変残念だ。出席のみなさまによりしくお伝えください」という言づてのあったことを紹介。また北海道での遭難事故に弔意を表したあと、日本山岳会の現状について次のように報告・挨拶した。

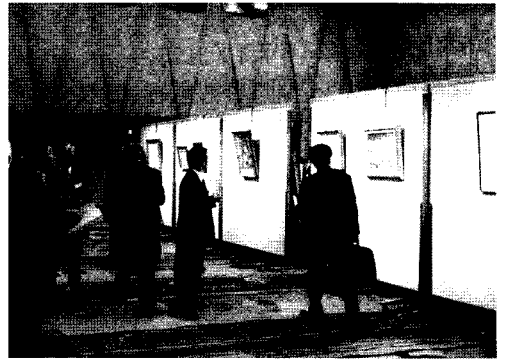
一、会員数の減少が続いている。平均年齢は65歳で、高齢化も進んでいる。若い人たちの入会をなんとか実現させたい。9月には、中国登山協会の会長と韓国を訪問し、中断していた日本・韓国・中国の学生交流登山を復活し、来春、日本で実施することにした。過日、指導委員会主催で積雪期入山者に

対する山岳遭難救助シンポジウムを開催したところ、若い人が100人以上も集まってくれた。雪山に入る若い人たちがまだまだたくさんいると感じた。

一、本年度から各理事にも委員会を担当してもらうことにした。委員会と理事会のよりキメ細かい連携を図るためだ。17の委員会があるが、大半は首都圏を中心とした動きなので、なんとか全国的な視野に立った活動ができないかと考えている。

一、新しく栃木、茨城、千葉に支部が設立され全国28支部となった。多様で活発な活動をしている。支部懇談会は、来年は10月11～12日に北九州で開催される。

一、公益法人か一般社団法人か



慶雲の間に展示された絵画の数々

を選択しなければならぬ。プロジェクトチームで検討しているが、公益法人の場合は支部との連結決算を求められることが予想され、苦慮している。将来的には、東京首都圏を含め全員が支部に入っていたことを視野に入れ検討を続けていきたい。

■新名譽・永年会員の紹介

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は46人。牧野衛、山本朋三郎名誉会員らが逝去された。11月には北海道支部定例の雪上訓練で突如発生した雪崩により4人の仲間を失った。心からご冥福をお祈りし

たい。

続いて新名譽会員が紹介された。若林啓之助、平山善吉、黒石恒の3氏。平山・新名譽会員は「17年は100周年記念事業をなんとか無事に実行することができた。みなさんのご協力に改めて感謝したい」などと挨拶した。

新しい永年会員は36人。1957年4月から翌年3月までに入会した会員だ。マナスル初登頂の余韻が残っていた年だった。以降継続して50年間、会員として活躍された。会員番号は4498から4651である。うち20人が出席し、宮下会長から永年会員章が手渡された。新永年会員を代表し、中村純二会員は「あつという間に50年が過ぎ去り、山岳界はおおきく変化した。山登りには、困難な激しい未知のルートへの挑戦だけでなく自然のふところに入って思索にふけるスタイルがある。リーダーまかせでなく、自分なりの山を選び、山登りを続けてほしい」などと挨拶した。

新永年会員

阿部和行、蒲生明登、池田昭二、和崎俊雄、岸本伍郎、大森弘一郎、中藤剛、佐藤晴夫、福原健司、石

村実、中村純二、今澤寛、杉原八百樹、高本孝、吉野禎造、前田清子、藤野欣也、滝澤信三、大谷一良、金光義朗、風間満治、吉田英吉、鈴木淳平、寺本滉、松本健夫、本間兌二、田邊壽、鈴木康仁、山野井武夫、芳賀孝郎、平井一正、岩坪五郎、中島道郎、村上万、小峰頭一、齊藤健治

■秩父宮記念山岳賞

第9回秩父宮記念山岳賞は、松本健夫会員の「崗日嘔布（カンリガルポ）山群の踏査と研究」と決まった。表彰式が行なわれた。松本会員は「横さんをはじめ、諸先輩に実いろいろなことを教えても



秩父宮記念山岳賞を受賞した松本健夫氏の講演

らった。それを実行していった。諸先輩・後輩に支えられての賞だ。喜びを分かち合いたい」と語った。

■新入会員は99人

続いて、新入会員の紹介。今年99人が新しく会員に加わった。代表して深田森太郎会員が挨拶した。深田新会員は故・深田久弥元副会長のご長男である。久弥氏の会員番号は1586番だった。「たいへんな伝統と歴史のある会の一員に加えてもらって喜びと緊張を味わっている。白山の自然保護などを通じお役に立ちたい。私ごとながら、父が楽しそうに『ルームへ行く』と言って出かけていたのを記憶している。会員番号が若いと言って自慢していた。入会したと言ったら、おまえなんかまだダメだと。私の会員番号は1万4000台。父より1万3000近くも多いことに歴史の重みを感じる」などと語った。

恒例の鏡開きは、宮下会長のほか平山新名譽会員、松本健夫会員、中村純二新永年会員、阿部和行新永年会員、深田森太郎新入会員の6人で行なった。酒は故・第十五代今西壽雄会長の夫人から寄贈の

社)日本山岳会 平成19年度 年次晩餐会



壇上で紹介された新入会員

あった「四海王」。いつもながら、感謝したいと思う。

阿部新永年会員の音頭で乾杯し、会食が始まった。メニューには「実り多い秋の山をイメージ」、「雪山に登ったあとに花園に降りてきたようなイメージ」などのメッセージが添えてあった。

会食をはさんで全国28支部会員の紹介があった。北海道で悲しい事故があったが、支部の活動は活発だ。新しく発足した栃木支部からは8人、茨城支部からは9人、千葉支部からは28人が参加した。参加者は紹介されるたびに立ち上がりハンカチを振った。それに応え、盛大な拍手が会場いっぱい

広がった。

■海外遠征・登山報告

晩餐会に先立ち、午後2時30分から1階「紅玉」の間で海外遠征報告、また秩父宮記念山岳賞受賞記念講演があった。

まず大蔵喜福会員のマッキンリー気象観測報告。5715地点に定点気象観測所を設置して収集したデータから、気温と湿度、風速と圧力、気圧による高度変化などについて解説・説明し、「1990～2000年の11年間に記録した最低外気温度は95年12月のマイナス59・4度、プロペラ型センサーによる最大風速は94年7月の82・5^{km/h}／秒だった」などと報告した。

続いて石川支部のインド・マリ峰登山報告。支部の創立60周年を記念して初登頂を目指した。登山許可が遅れ目的は果たせなかったが、近くの未踏峰に登ることができた。「マーン峰と名づけた」と話すと、「いいでしょう」と言ってくれた」などと、副隊長・織田伸治会員は話した。

平出和也氏はオリジナリテイのある山登りを目標にしているとい

う。パキスタン・シスパーレ峰(7611^m)への挑戦を披露した。

関西支部と同志社大学山岳部によるネパールのクビ・カンリ(6721^m)初登頂・学術調査報告は、同志社大1年の小林博史君が行なった。学生全員が初登頂を果たし、学術調査では西チベット地域での氷河の後退を調査、温暖化の進んでいることを明らかにした。スウェン・ヘディンの報告との比較で約100年の間に氷河の舌端が1200^m以上も後退したという。

■秩父宮記念山岳賞講演

第9回秩父宮記念山岳賞を受賞した松本徑夫会員の講演があった。村木潤次郎・審査委員長の表現を借りれば、ナムチャバルワを西の端にして東側に延々と続く氷雪の山脈がカンリガルポ山群である。福岡支部が2001年から5回にわたって、この地域を踏査した。

松本会員は調査隊長として活躍し、その成果を今年4月出版した。未踏峰が乱立している。山名も定かでない。ソ連の地図をベースに住民から直接聞き取り調査し、36座・37の山の名前を明らかにした。松本会員は「屋久島で山の猟師

から谷の名前を聞いて調べたことがある。同じ手法だ」と話した。調査は植物、哺乳類、魚類、チベット仏教など幅を広げた。4月に出版した著書は800^pを超えてしまった。

■会場の催しと懇親山行

慶雲の間で、いつもながら多彩な催しがあった。日本山岳会が所蔵している絵画10点が、資料映像委員会によって展示された。普段は目録でしか知ることのできない絵画が並べられ、シユラギントワイトの石版画がひときわ目を引いた。フリーマーケットでは、支部委員会、同好会、同期会がそれぞれに山の本などを販売した。

翌日の懇親山行は、集会委員会が主催し、神奈川県の大山で行なわれた。丹沢山塊のなかで最も多くの人が訪れる山だ。晴天に恵まれたこともあり、参加者は80人を超えた。山麓は紅葉が残っていた。暖かい日だまりのなか、参加者は山頂で豚汁を楽しんだ。

(文)高橋重之、写真)神長幹雄